第７３回全道高等学校演劇発表大会 in 十勝「舞いあがれ　なつぞら大会」

上演番号４番　北海道余市紅志高等学校（後志支部）

「被服室の変」 作：余市紅志高校演劇部

舞台は学校祭準備期間の被服室。校内放送から始まることにより学校祭の賑やかさを表現していて、作品世界により入りやすく、劇に没入することができた。そこに、千葉がマネキンを運んできた。これには千葉がひた隠しにしながら作っているドレスが飾られていた。実は趣味であったことだと演劇部員の岩本とのやりとりによって知らされる。

岩本が、演劇部に入らないか？　と千葉を勧誘していくことで２人の距離も縮まっていった。それぞれが抱く悩みが描かれていたが、それが会話を通して少し変わった。

また、暗転が一切なく時間の経過を作業で表している演出がとても素晴らしいと思った。台詞が一切無い中、作業を続けることや、あえて地明かりのみにすることで、より現実味を増すことができていた。照明やセットに頼らず演技で勝負していた。

題名の話になるが、この「被服室の変」の「変」の字には、さまざまな意味が込められているということが話し合いに出た。中盤では、演劇部あるあるが満載でとても共感することが多くて馴染みやすかった一方で、演劇部は「変」人しかいないという話題になった。「変」人というだけでなく、「変」わる人ととれることもでき題名だけでこんなに考えさせられる話で本当に素晴らしいと思った。

千葉がマネキンを岩本から遠ざけるシーンでは、自分のしていることが見られたくない、隠したいといった気持ちがあってマネキンをずらしていたのではないかと思った。

終盤には岩本が、小道具を持ってきたり、竜宮城の芝居を再現するというシーンがあった。それは自分も変人であることを千葉に示すためだと感じた。そして、千葉に、異性の服に興味を示していることは変じゃないよと伝えているようにも感じて、個人を尊重し、自分のしたいことをすればいいというメッセージにも受け取れた。

間をたっぷりとっていて、いつセリフがくるのだろうという期待感や登場人物の葛藤が感じられ、飽きさせることなく観客を惹きつけていたのが効果的だった。

岩本の熱い説得により、最後は自分で作っていた髪飾りを頭につけ、自分が作った赤いドレスを鏡の前で合わせてみるという小さな、いや大きな一歩を踏み出していく様子が見られよかった。

このお話はたくさんの解釈が生まれ、千葉はこのドレスを着たかったのか、作りたかっただけなのかの２つで意見が分かれた。着たかったと解釈した側の根拠として、岩本に「着てみる？」といわれたとき何も答えなかったことが挙げられた。また、「作りたかっただけ」と解釈した側の意見としては、着たいだけなら家でもいい、千葉は作ることすら隠しており、それは自分の思想を見せたくないことを表しているということが挙げられた。また、本音は着たかったけど、なかなか着られず、ヒラヒラの髪飾りをつけるという小さな一歩を進めることができたことから、自分が作ったものを着ることに意味があるのではないかという意見もあった。

私もこの主人公千葉のように、勇気を出して小さな一歩を踏み出していきたいと思える作品だった。

小門咲優理（帯広北）　　田中陸斗（札幌第一）